

<文化と文学>

グリム童話「一つ目、二つ目、三つ目」の物語

● 金 成 陽 一

山羊

グリム童話 KHM130は「一つ目、二つ目、三つ目」(Einäuglein, Zweiäuglein und Dreiäuglein)という奇妙なタイトルがついている。目を意味するドイツ語 Auge にわざわざ小さいものを表す語尾-lein をつけて Äuglein としているのは、姉妹の目が小さかったというのではなく、三人ともまだ子供であったのを示したのだろう。一つ目の姉と三つ目の妹、そして母親の三人は真ん中の女の子が他の人間どもと同じように二つ目だからいじめていたのだという。いじめていたこの母親の目が一体いくつあったのかについてテキストはまるで触れていないけれど、しかし二つ目に「お前は我々の仲間ではない」と言っているから、彼女もきっと二つ目ではなかったのだ。

「目は口ほどに物を言う」と諺にあるように、目は重要な一つのコミュニケーション媒体である。言葉でうまく誤魔化したとしても、目に本心が現れてしまうのはあり得ることで、まさしくそれは「心の鏡」といえよう。三人姉妹はみな外見が違っていただけなのに、殊更二つ目だけがいじめられた本当の理由は別なところにあったのではあるまいか。他の二人に較べて精神的にまだ幼い彼女は、母とのコミュニケーション（伝えたいことを相手に理解させる能力）がうまくとれずにいたのである。一度いじめが始まると、往々にしてそれは日常化していくもので、深刻な場合には弱者の死に至る。親が幼児を虐待の末、殺してしまう事件など別段今に始まったことではない。よいコミュニケーションとは周りの人々からの孤立を避け、幸福な日常をもたらしてくれるものなのに、この母親と三姉妹は家という自分たちの小さな世界だけに閉じこもり、あまり外とのコミュニケーションを持たなかったようにも見える。二つ目は姉妹たちからあまり食事をもらえず、腹ぺこのまま野原で山羊の番をしなければならなかつ

た。しかし彼女は幸運にも一人の親切な魔女 (die weise Frau) に出会い、山羊とのコミュニケーションの取り方を教わったのだ。それは自分自身の内面との対話 (dialogue) の始まりでもあっただろう。

山羊ですぐ連想されるのは、^{サバト}魔女集会を取り仕切る首領の姿である。女と山羊との性交は元々作物がよく実るようにとの願いが込められた儀式だったのに、後になるとそれが魔女に関連づけられ、山羊への崇拜もいつの間にか雄牛崇拜へと変わってしまった。山羊も雄牛も常に活力を失わぬことから再生を表すと共に、強い父親の象徴ともなっていたのである。この物語の山羊はしかし中世サバトに出てくるおぞましいイメージではなく、むしろもっと昔の古代ギリシャ時代、クレタ島のイデ山で赤子のゼウスに乳を与えて育てたアマルテア (Amalthea) という牝山羊を彷彿とさせる。アマルテアは、父クロノスが自分の息子ゼウスを呑み込もうとするのを防いだ山羊なのである。

ゼウスがアマルテアと遊んで、その角の一方をふとしたことで折ってしまった時、彼はそれを彼女へのプレゼントとして「一言願い事をすれば、角は果物で一杯になるだろう」と告げる。これが豊穰の角と呼ばれるものである。二つ目の前に現われてお膳の支度をしてくれる子山羊の姿は、子供のゼウスに生きる糧を与えていたアマルテアのイメージと重なってくる。別な言い伝えでは、見るも恐ろしい怪物であったといわれるアマルテアは、その後ニンフに変身して養育の女神となり、授乳者、秘儀伝授者のシンボルとなっている。

一方、北欧神話にもヴァルハラで死んだ戦士たち (エインヘルヤル) に尽きることのない蜜酒を供給するヘイドルーンという名の山羊が登場してくる。戦士たちは夜宴会を開きながら、世界の最期の時ラグナレク (神々と巨人族との間に起こる終末の戦い) を待っていたのである。

ヴァルハラの外側で草を食べている山羊はヘイドルーンと呼ばれる。彼女は自分をかばっているレーラルズの枝々を、少しずつかじっている。そして毎日彼女は乳をしぼられて、大きな水差しを上質の澄んだ蜜酒で満たす。その水差しにはまったく底がないように思える。⁽¹⁾

二つ目の女の子は野原で腹ぺこでも、山羊と一緒にいた時だけは少なくとも姉妹たちにいじめられることはなく自由に振舞えたのである。女の子はこの山

羊とだけはうまくコミュニケーションをとることができたのだろう。彼女のお腹がいっぱいになるのは、精神的にも満たされたという象徴であろう。良い会話のできる相手が一人でもいる人の幸福は、そうでない人と決定的に違うのだ。

人と人との付き合いが希薄になってしまった現代では、ペットによって癒される人は少なくない。ペットは裏切らないし、人間とのように複雑で面倒なコミュニケーションも必要がない。この物語は、小動物によって慰められ救われていく子供の姿を描いているといえるかもしれない。たとえば、チンパンジーを使ったコミュニケーションに関する研究が沢山あって、「(チンパンジーは)今では、我々が考えていたよりずっと複雑なメッセージの伝達を学習できることが明らかにされている」⁽²⁾という。また、野原には「束縛からの解放」や「行為の無限の可能性」といった暗喩もあることを付記しておく。

さて、子山羊の呪文によって満腹になった女の子は家に帰ってから出された食事には手もつけず、しかもそれが何度も続いたので姉妹たちに怪しまれるようになってしまう。彼女がもう少し大人だったなら、出されたものはまずくても食べてしまうとか、あるいはそっと捨ててしまうとかもっとうまく立ち回ることができたのだろうに、如何せん彼女はまだまだ幼すぎた。しかしその一方で、二つ目は一つ目が牧場へついて来た時、その理由がちゃんとわかっていたのである。彼女はとても用心深いのに、ある面では驚くほど無防備で、自分の秘密を守り通すことができない。もっともこれが思春期の特徴なのかもしれない。人間はこんな風に失敗を繰り返しながら成長していくのだろう。恐らく他の三人は二つ目の外見だけではなく、何もかもが気に入らなかったのだ。ある本は、「特殊な状況で効果的なコミュニケーションをするには、直接的な答えを避けて、自分の意図するところを隠しながらも、オープンで率直に見えるように言葉を使う方がいいであろう」⁽³⁾とアドヴァイスするが、こうしたことは大人にだってなかなか難しい。言語だけがコミュニケーションの手段とは限らないから厄介なのである。

目

「一つ目、起きてるの？ 一つ目、寝てるの？」と二つ目が歌う場面は大いに子供たちの興味を引く。子供は、軽快に韻を踏む調子の良いこうした短い言い回しが大好きなのだ。ヘンゼルとグレーテルがお菓子の家を見つけた時の文

句や、白雪姫の継母が鏡に向かって繰り返す台詞などがすぐに思い出される。

ルーマニアやいくつかの地方には、三つ目の女の子の目の一つが首のところについていたので、髪の毛で隠されたりしてわからなかったという類話もある。それにしても、二つ目が三つ目に向かってうっかり「二つ目や寝ているの？」と歌ってしまったため、三つ目の二つの目玉は眠っても三番目の目は眠らずに起きていたという展開は面白い。つまり肉体的に正常である二つの目に対して、三つ目は超人的、神的な目なのである。ゼウスは時に三つ目であらゆるものをはっきり見だし、北欧神話のトールも同様であった。両者が雷神であったのもよく似ている。また、ギリシャ神話の一つ目巨人といえばキュクロペスという額に一つの目を持つ怪物で、その一人ポリュペモスはオデュッセウスの酒で酔った後、杭で目を潰されてしまった。

万物の父オーディンがいかなる理由で一つ目になったのかを北欧神話⁽⁴⁾は次のように述べる。

ある日オーディンは、もっと知識をふやしたいと思い、この泉にミミールを訪ねていった。

「ミミールよ、わたしはもっと知識を富ませたいのだ。どうか、きみの泉の水を飲ましてくれ。」

「そんなにこの泉の水が飲みたいのか。だが、容易なことでは飲ましてやれないぞ。」と、ミミールはいった。

「どうしてお礼をすれば飲ましてくれるかね。」と、オーディンはきいた。

「おまえの片目をよこすなら、飲ましてやろう。それ以外のことではだめだ。」

これにはさすがのオーディンも、「ううむ。」とうなっていたじろいだ。しかし、賢くなりたい願いを、あきらめることはできなかった。彼はぐいと片目をえぐりだしてミミールの泉に投げこみ、こうしてその水を一口飲ましてもらった。オーディンが片目だというのは、こんなわけからであった。

一つ目はかように悟りの目が開くことを意味する反面、前述のキュークロペスといった怪物たちに見られるように悪の象徴でもあった。因みに、フェニキアの「時の神」クロノスは四つの目を持っており、二つが開いている時あとの二つは閉じていて、絶え間なく見張っていたのだという。このクロノス(Chronos)はゼウスの父であるクロノス(Cronos)とよく混同された、とい

うのも、時は自分が生み出す全ての物を呑み込んでいくものだし、ギリシャ神話のクロノスも自分の子供たちに危害を加えられそうになった時、次々に彼らを呑み込んでしまったからである。

二つの目は幸福と悲しみを表すともいわれる。二つ目の女の子は、いじめられていた悲しみの日々から一人の男性によって救いだされ、まさしくもう一つの幸福の目へと変わっていった。ハムレットの父を殺して国王となった叔父も、兄嫁を妻とするにあたって、「いわば、うちひしがれた喜びをもって一つまり片眼には喜びを、片眼には涙をたたえ〜」（小田島雄志訳）と述べている。

継母が二つ目を助ける子山羊を包丁で殺してしまうシーンは、色々な昔話に登場してくる。古くは南方熊楠が「シンデレラ」のルーツではないかと指摘した九世紀中国の「葉限」（「西暦九世紀の支那書に載せたるシンデレラ物語」⁽⁵⁾）があり、この中で継母が殺すのは魚であった。娘がゴミ溜めの中から殺された魚の骨を掘り出してそれに祈ると、彼女の欲しい衣装でも食事でも何でも出てきたのである。娘を援助してくれるのは、突然天から降りてきた「粗衣を着たざんばら髪の人」となっていて、優しい「神通力をもった女の人」（die weise Frau）であったグリム童話とは大分違っている。

ウクライナの昔話「金の靴」で殺されるのは牝牛。娘がその臓物を洗うと小さな小麦の粒が出てきて、それが娘を助ける柳の木になる。

娘はそれ（粒）を戸口のわきに蒔き、土を踏みつけて水をかけておいた。翌朝娘が目をさますと、そこには柳の木が生え、根もとからはどこにもないほどの美しい泉がわいていた。⁽⁶⁾

ヨーロッパの類話で娘が動物のはらわたを貰うのは、大昔臓物が神々への生贄として捧げられた名残りでもあろうか。そこは一番美味しい部分なのだから、神に捧げるのは当然であった。プロメテウスの伝説は、臓物を神々に捧げる理由を次のように述べている。

メコネで、食物のうちどこを神々の分としてとっておくべきかを決めるために、神々と人間とのあいだで会合を開くことになった。プロメテウスは調停者として牛を引き出し、それを切り分けて肉を二つの包みに包んだ。一方の包みは内臓を脂肪で包んだものだが、もう一方は美味な肉を皮で包んだものだった。

それから彼はゼウスに包みを選ぶように言った。ゼウスはごまかされまいと思ったが、結局わなにはまってしまい、つややかな脂肪の包みを選んだ。それ以後人間が神々に捧げる犠牲は常に脂肪と内臓ということになった。⁽⁷⁾

リンゴ

母と姉妹にいじめられていた主人公の女の子が、最後に若いお金持ちの男性と結ばれて幸せになるのは「シンデレラ」型昔話のパターンである。ポルテとポリーフカの注釈⁽⁸⁾によれば、元々伝説であったこの作品をヴィルヘルム・グリムが「自分のやり方で」書き換えてしまったのだという。

古い記録では1559年から1566年の間にシュトラスブルクでマルティン・モンターヌス (Martin Montanus) によって書かれた「二人の子供のいる婦人の美しい物語」(Eine schöne History von einer Frawen mit zweyen Kindin) がある。この冒頭で継母が女の子を二度も森の中へ捨てに行こうとする場面は、「ヘンゼルとグレーテル」によく似ている。昔話はこのように面白く耳に心地よい部分が色々な話から集められて、次第に一つの新しい形になってきたのだ。日本昔話でも、たとえば「花咲爺」や「舌切雀」の類話には「桃太郎」の出だしとそっくりなものもいくつか見受けられる。川で洗濯していたお婆さんが桃（あるいは柿や鳥籠）を拾い上げて家に置いておくと、それがいつの間にか犬や雀に化けていたという訳である。

さて、本来の「シンデレラ」にリンゴは出てこないけれど、こちらの話ではそれが重要な役割を果たしていた。禁断の木の実であるリンゴは、人類の母であると同時に死をもたらす存在でもあったイヴの危険な一面とも関連している。乙女から母親となる女の姿は北欧では冥界の女王ヘル (Hell)、そしてギリシャでは地母神ヘカテ (Hecate) で、そのイメージは「グリム童話集」や「ドイツ伝説集」の「ホレおばさん」(Frau Holle) にも影響を与えている。この女神のリンゴは民間伝承ではしばしば有毒であるとされた。「白雪姫」の継母が作る毒リンゴもこうした伝承の延長線上にあるのかもしれない。中世の聖職者たちの宣伝によれば、「魔女は狙った人間にリンゴを送って、悪魔に取り付かれるようにする」のだという。子供や他人にリンゴをやったところ、その人が発作を起こしたとして殺された老婆の記録も残されている。

ギリシャ人は母神ヘラ (Hera) が西方に魔法のリンゴの木を持っていると

考えていた。そこでは「生命の木」がヘラの聖なる蛇によって守られていたの
である。「イヴとアダムと木にひそむヘビの話は太女神が崇拝者にリンゴの形
をした命を与えている図像を誤って解釈したものであるという。その図像の背
景にはリンゴの木とヘビがいる。」⁽⁹⁾

黄金のリングにまつわる有名なギリシャ神話といえば「パリスの審判」であ
る。イデ山中でヘラ、アテナ、アプロディテの三美神が、争いの女神エリスが
投げた「最も美しい女性へ」と記された黄金のリングを自分のものであると争
った時、三人の女神は誰が一番美しいかの審判をトロイ王プリアモスの息子パ
リスに頼み、それぞれが自分を選んでくれたなら何をプレゼントするか示した
のである。ヘラは全世界の覇権、アテナは戦いの勝利、そしてアプロディテは
世界一の美女であったが、パリスは結局世界一の美女に一番興味を引かれ、ア
プロディテに黄金のリングを与えたのであった。彼はその後アプロディテに保
護されてスパルタ王メネラオスの妻で絶世の美女ヘレネを手に入れる。神話で
はこの出来事がトロイ戦争の引き金となって、トロイが滅亡したことになって
いる。

更に、リングの象徴性は知恵と認識であり、これによってアダムが永遠に生
きる者となるためにイヴは彼にリングを与えたのだ。しかし中世になるとリン
ゴは肉欲の罪を表すと解釈されるようになっていく。その理由として、リング
を意味する *malum* というラテン語が悪の *malus* に似ていたためといわれている
けれど、本当のところはよくわからない。

山羊のはらわたを埋めた所から生えてきた黄金のリングを取ろうとしても、
二つ目以外には誰にもできなかつたのは、人を嫉んだりいじめることに喜びを
感じるような者たちは人間の幸福や生きる喜びを象徴するリングの木に相応し
くないことを表している。聖書「雅歌」の中でのリングは恋人を指している。

干しぶどうをもって、わたしに力をつけ
りんごをもって、わたしに元気をつけてください。
わたしは愛のために病みわずらっているのです。⁽¹⁰⁾

二つ目もぎ取る黄金のリングは、まさしく恋人への愛の贈り物だったので
ある。リング同様、黄金も豊穡や愛を意味している。隠されていて手に入れる
のが難しい黄金は、発見された時、既に完全なのである。銀の葉がついた黄金

のリングとは、つまり人間の精神を表す銀と、完全な神の精神を表す金が合わさって、神聖な結婚や神への道を形成している。銀の象徴性としては純粹、無垢、曇りのない良心などがあげられるから、誠実な二つ目の女の子には何の違和感もなく受け入れられただろう。これに対して彼女をいじめていた母親や姉妹たちの性格はその正反対だから、彼女たちに黄金のリングが取れなかったのは当然であった。

母親と二人の姉妹が木に登ってリングを取ろうとしても、「とろうとするたびに枝も実も後びっしりするものですから、どうしても枝を折ることができ」なかったという。手が届きそうでも絶対に取ることができない状況とは、考えてみれば一番残酷ではないか。同様の罰を受けてタルタロスへ送られてしまったのはギリシャ神話のタンタロスだ。タルタロスとは極悪人の行く地下の最奥にある無間地獄の名で、神々の知を試そうとしたタンタロスはここに住まねばならなかったのである。

彼は沼に立たされ、顎近くまで水に浸っている。しかも非常な渇きに襲われ、水を飲もうとしてかがむと、その度に水は引き退って、足元に黒い土が現れてくる。また高い樹に沢山果実が熟れているのを、もぎ取ろうと手を伸ばすと、風が来てその枝を高く吹き上げるのであった。こうして彼は梨や柘榴や林檎や甘い無花果やいっぱい実のついたオリーブなどを目に見ながら、烈しい飢渴に悩みつづけなければならなかった。⁽¹¹⁾

優しくない人や意地の悪い人には誰も寄ってはこないし、むしろ逃げていくだろう。黄金のリングは二つ目の女の子以外には誰にも取ることができなかった。この物語は、それが「愛のシンボル」であるのをさりげなく子供たちに伝えているのである。

註

- (1) K・クロスリー・ホランド「北欧神話物語」。山室静・他訳。青土社。1983年。
- (2) 竹内敬人編「言語とコミュニケーション」。東京大学出版会。(動物のコミュニケーション) 青木清。
- (3) サンドラ・サヴィニョン「コミュニケーション能力」－理論と実践－。草野ハベ

ル清子・他訳。法政大学出版局。2009年。

コンテクストがやや分かり難いので、同書より更に引用しておく。

「私たちの皮膚の色・服装・ヘアスタイル・立ち方・微笑み方・聞き方・頷き方・間の置き方などすべてが、話す時の声と言葉とともに他者へ情報として伝達される。私たちは誕生の時からコミュニケーションに関心を抱き、人生経験を重ねるたびに、新しい状況にどう対処すべきかを学んでいく。しかし、私たちが意図する意味と伝達される意味とはしばしば違ったものとなる。考え方と感情がシンボル表示に移行するプロセスつまり、書き言葉・話し言葉・ジェスチャー・デザイン・色・動き・音において私たちは選択をしなければならない。私たちの伝えようとする意味は、それらのシンボルの理解を共有する他の人々によって決まるのであって、彼らが必ずしも私たちが意図したように解釈してくれるかどうかは分らない。」(S.18)

- (4) 山室静「ギリシャ神話」。社会思想社。昭和38年。
- (5) 「南方熊楠全集」第二巻。平凡社。昭和46年。
- (6) 山室静「世界のシンデレラ物語」。新潮選書。1979年。
- (7) マイケル・グラント・他「ギリシャ・ローマ神話事典」西田実・他訳。大修館書店。1988年。
- (8) Bolte/Polivka: Anmerkungen zu den Kinder - und Haus - Märchen der Brüder Grimm 1: Olms - Weidmann. Hildesheim. 1992.
- (9) バーバラ・ウォーカー「神話・伝承事典」山下主一郎・他訳。大修館書店。1988年。
- (10) 旧約聖書。「雅歌」(第2章5節)。日本聖書協会。1987年。
- (11) 呉茂一「ギリシャ神話」。新潮社。昭和44年。

(参考文献)

- Anti Aarne/Stith Thompson: THE TYPE OF THE FOLKTALE: Helsingin Liikekirjapaino Helsinki. 1981.
- ジャン・シュヴァリエ「世界シンボル大事典」金光仁三郎・他訳。大修館書店。1996年。
- J・C・クーパー「世界シンボル辞典」岩崎宗治・他訳。三省堂。1992年。
- 大堀壽夫編「認知コミュニケーション論」6。大修館書店。2004年。
- J・B・ベンジャミン「コミュニケーション」
(話すことと聞くことを中心に)。二瓶社。1990年。